

◎連載・海外便り  
[その9]

## 南米・ボリビアにみる 食品・包装流通事情

食品流通アドバイザー

(公益社団法人 日本包装技術協会 技術委員)

田中技術士事務所 代表 田中 好雄

Y. Tanaka

南米・ボリビアの共通語はスペイン語、日本の約3倍の面積をもちそこに約1,000万人の人々が生活する。日系人は約1万2,000人である。この国は起伏に富んだ地形をしており、ボリビアの西側アンデス山系に属する首都ラパス(世界最高地の首都)は標高約3,700mのアルチプラノ(高地)からなり、私の任地サンタクルスは400mの低地が広がっており、熱帯・亜熱帯に属し標高差や地域により気候が異なる。

国民1人当たりの国内総生産(GDP)はUS\$約4,000。伝統的な農業と鉱業が主要産業である。先住民は紀元前7,000年頃からすでに豆類、トウモロコシ、カボチャなどの作物を栽培していたと考えられている。主要な産物として大豆、ポテト、トウモロコシ、サトウキビ、コメ、牛肉、天然ガス、石油などがある。生活のレベルは日本の30~40年前の状態であるといわれるが、ブラジル、アルゼンチン、チリ、米国などの近隣諸国や先進国の影響で私の専門である食品包装に関しては、古くから行われてきた輸送包装と一歩進んだ消費者包装が混在する。今後は、道路、河川、水利、電気などの基幹産業のインフラ整備、医療、教育、農業開発、環境・廃棄物対策がこの国の最重点テーマである。

農業国であるために農畜産物の流通が盛んで、夕方収穫した青果物や生きた動物たち(ウシ、ブタ、ヤギなど)をトラックに積み込み120~250km離れた産地から消費地まで夜間輸送してくる。卸売市場に明け方に到着してそれらを仲買人が購入して相対で販売する。一般市民の卸売市場への出入りは自由であり、早朝から夕方まで人でごった返す。青果物の輸送包装の例としては、木箱、カゴそしてボルサと呼ばれるポリ

プロピレン製の袋が使われている。

南国特有の猛暑が続く当地では2ℓ、2.25ℓ入りのコーラや炭酸飲料、ミネラルウォーター

などが店頭と並んでおり、流通の簡便化と塵埃などの異物の付着を防ぐ目的で、6本のボトルを厚手の取縮ポリエチレンで外装し輸送、販売している。PETボトルがこの種の飲料の材質として定着しており、家庭やレストラン、レジャー施設、街角の売店などで多くの人々に親しまれている。コカ・コーラなどの大手飲料メーカーはパイプラインの製びん工場をもっている。

ネローレ種に代表される白色でこぶのあるインド牛の改良種が放牧飼育されており、最近問題になっているBSE(ウシ海綿状脳症・狂牛病)の心配はないが、肉質の硬さには閉口させられる。牛肉が庶民に親しまれており、このほかにも豚、鶏肉が食卓に上る食材の中心的役割を果たしている。

包装材料の製膜、製袋、印刷技術などはまだまだ改善の余地を残している。原反のしわ、印刷斑、製袋不良、2次シール切れや取縮包装材料を非取縮で使用しピンホールやドリップの広がりが見られる場合もある。

灼熱の太陽と恵まれた自然、アスタマニアーナ(さようなら、また明日)に代表されるのんびりした国民性、地球の裏側の日本とは一味違った雰囲気をもつ「南米・ボリビア」、充実した日々と何にも代えがたい経験ができたことを感謝する次第である。



LDPE(低密度ポリエチレン)のインフレーション設備